

# 小児救急さぼネット通信 ～ #8000保護者の声から考える～

支えます、家庭の力、医療の力



#002 : 2024.summer

さぼネット通信は、電話相談から得られた保護者の声やデータを基に発信しております。  
保護者が安心して子どもを見守ることができる体制を作るために、少しでもお役に立てれば嬉しいです。

## 2023年度の大阪府#8000のまとめより

#8000の件数はコロナ禍を除けば、年々増加傾向です。

件数が増加しても、年齢構成や症状などは大きな変動はなく、むしろそこが特徴のようにも思えます。

保護者はどんどん入れ替わっているはずなのに変わらないのは、不安解消に有効な手立てを打てていないのか、あるいは事前の学習があっても現実の子どもの病気に遭遇したときに不安感をかき立てられるのは生物としての本質なのかとったりもします。

もちろん相談件数や症状は感染症の流行の影響を受けますが、子どもを取り巻く社会的な背景を感じることもあります。  
2023年度の総件数・年齢構成とここ数年注目している新生児の相談件数を示します。

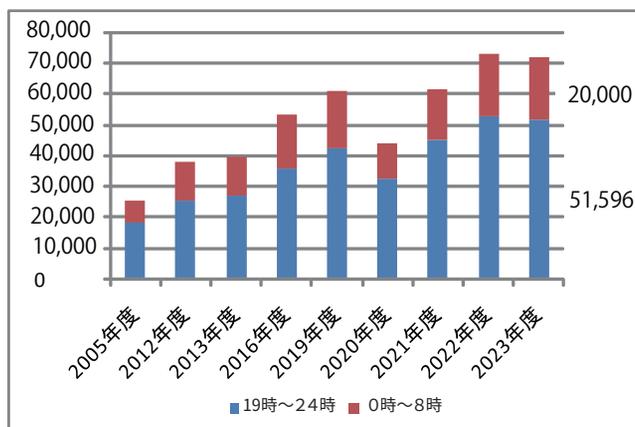


図1. 相談件数の推移

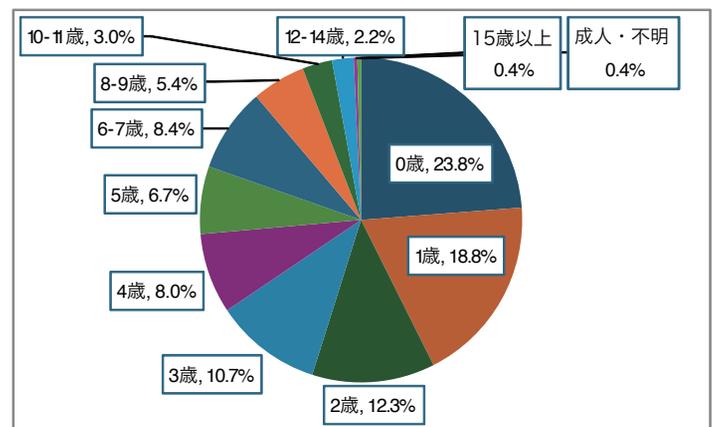


図2. 対象となる子どもの年齢

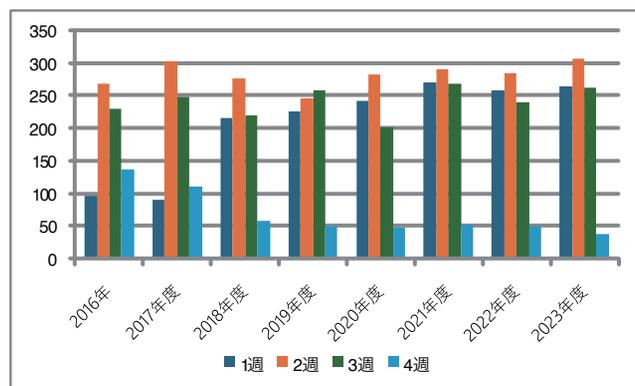


図3. 0か月児の相談件数



新生児の相談は、#8000で週齢の集計を開始したときから今まで第2週が多く、生後2週目健診開始後も減少することなく推移しています。さらに2018年度から急に第1週の件数が増え、高い値が継続しています。

相談内容からは、病気が増えたというより、新生児の呼吸や溢乳などが生理的現象かわからず不安になっている様子が窺えます。急増の理由は不明ですが、0歳児の赤ちゃんの見方や家庭でのケアについて支援はまだ不十分であると強く感じます。

# お家で病気の子どもを見守るために

## 発熱 その2 坐薬（坐剤）の使い方

発熱の相談のなかで、解熱剤の坐薬の相談もよくあります。2018年4月に1歳児の発熱に関する相談 200名の調査(表)では、23%で解熱剤の相談があり、そのほとんどが坐薬についてです。



相談の内容から  
保護者が何が不安なのかを考えてみたよ。

気がかりなこと	件数	発熱に対する比率
熱が高い	151	75.5%
気になる随伴症状	129	64.5%
症状の持続	80	40.0%
◎ 解熱剤に関して	46	23.0%
熱からくる心配	21	10.5%
既往・診断がある	21	10.5%
予防接種	17	8.5%
医師の助言に伴う	13	6.5%
感染の心配	9	4.5%
その他	16	8.0%
n	200	100.0%

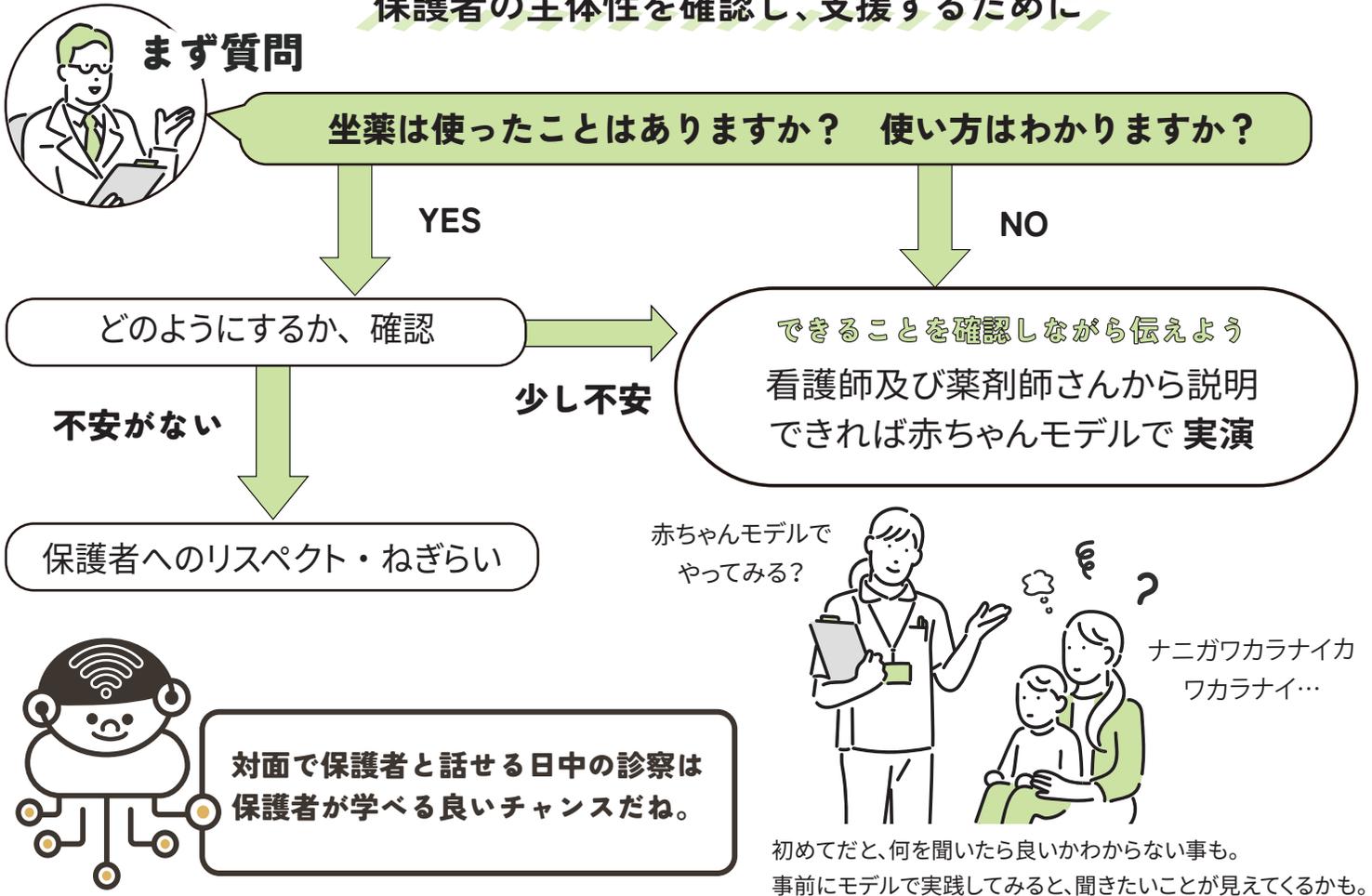
表. 発熱の相談で、保護者が気になること

### ◎ 相談の内容から推測される保護者の状況

<p><b>よくある質問</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 解熱剤を使用したけど熱が下がらない</li> <li>● 使用するのが躊躇している</li> <li>● 早めに解熱剤を使用したい</li> <li>● 使い方を知りたい</li> <li>● 以前に出された解熱剤を使って良いか知りたい</li> </ul>
<p><b>この相談に対する相談員の対応</b></p>	<p>① 子どもの状態の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 熱は今何℃?</li> <li>・ その前に測ったのはいつ?</li> <li>・ お子さんは今どうしていますか? ・ 手足は熱いですか? 水分は取れていますか?</li> <li>・ お母さん(お父さん)から見てお子さんはだいぶしんどそうですか?</li> <li>・ 眠れそうですか?</li> </ul> <p>② 薬についての確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 坐薬はこれから使いたいのか、使った後であればいつ使ったのか?</li> <li>・ 坐薬は本人のために病院(クリニック)で出してもらったものか?</li> </ul>
<p><b>相談員からの助言</b></p> <p>P.3 保護者にわかりやすい説明の文言参照</p>	<p>坐薬を使うタイミングや使用方法、目的などについて、必要なことを説明 解熱剤以外のケア方法(クーリング) その他、心配事への説明</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;"><b>大阪府#8000 オススメのクーリング方法</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 水で濡らして絞ったタオルで体全体を拭く→うちわや扇子などで扇ぐ</li> <li>◎ 首・脇・股の足の付け根のところを、布にくるんだ保冷剤で冷やす(嫌がる場合はしない)</li> </ul> </div>
<p><b>推測される保護者の状況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 早く熱を下げないといけないと思っている。</li> <li>◎ 熱が高いことはよくないと思っている。</li> <li>◎ 坐薬を入れる/解熱剤を早めに使ったほうが良いと思っている。</li> <li>◎ 坐薬を入れる/解熱剤を使ったら、平熱まで熱が下がることを期待している。</li> <li>◎ いざ使おうと思ったとき、坐薬の入れ方がわからない。</li> <li>◎ 自分の判断で坐薬を使っていいか自信がない。</li> <li>◎ ネットでは、坐薬を使って熱を下げたら免疫に悪影響のような記載があった。</li> <li>◎ 使っていいのか?</li> </ul> <div style="text-align: right; margin-top: 20px;"> <p>わかっていないから、 迷いや不安な気持ちに</p> </div>

# 家庭で落ち着いてケアするために：日中受診時に保護者が学んで欲しい事

## 保護者の主体性を確認し、支援するために



## 保護者にわかりやすい説明の文言（保護者に合わせて活用を）

座薬を使う タイミング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・熱は体が病原体と闘う免疫の働きことを助ける働きがあり、早めにあるいは急いで熱を下げる必要はない</li> <li>・熱が上がり始めに使うと効き目はよくない</li> <li>・熱はピークに達するころは、手足が熱くなるので、その時に使うと熱が下がりやすい</li> <li>・病原体との闘いが始まっているので、乗り越えるには時間がかかる</li> <li>・ぐっすり眠ることが、治るためには大事</li> </ul>
坐薬の使用 方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尖った方を先にして、オイルをつけ、肛門から全部が見えなくなるまで押し込む</li> <li>・泣き出すと体をよじらせたり腹圧がかかるので、寝転んだら少し足を曲げるなどしてリラックスさせ、挿入する。</li> <li>・1回使ったら、次に使うまでに最低6時間は空ける。</li> </ul>
坐薬の目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し熱が下がるだけで楽になり、眠れたり、飲めたりすることを目指す</li> <li>・平熱に戻す必要はない</li> </ul>
子どものケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今の子どもの手に触れて、熱い・冷たいの見方・感じ方を確認</li> <li>・熱の上がり始めは手足が冷たく、上がりきると温かくなり放熱するので、様子に合わせて衣類や寝具を調節することが大事</li> </ul>
労い・リスペクト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さすがです</li> <li>・しっかり、できています</li> <li>・落ち着いていますね</li> <li>・いっしょに見てくれる人はいますか？ など</li> </ul>



Q. どんな病気が考えられますか？

保護者からの質問は、そのことを聞きたいわけではないことも多いので、“何を困っていて、何が不安なのか”を解決してあげられると、保護者の不安解消に繋がります。「どんな病気が考えられますか？」という会話のケースを考えてみましょう。

医療者の解釈	解釈	診断は何ですか？
	返答	それは電話では、お答えできません。〇〇かなと思いますが・・。
言葉の裏側にある 保護者が聞きたいこと  翻訳		<ul style="list-style-type: none"> <li>①この子の病気は重症か軽症かどう考えたらいいですか</li> <li>②すぐ症状が止まらないのは、何か悪い病気ではないでしょうか</li> <li>③良くなるのは、ちゃんと診てもらっているのでしょうか</li> <li>④感染症の〇〇だったら、明日保育所に行けますか</li> <li>⑤ネットで見た〇〇の病気ではないですか</li> <li>⑥帰宅したパパにどんな風に説明したらいいですか</li> </ul>
保護者への返答		<ul style="list-style-type: none"> <li>①～③今の子どもの状態を確認しつつ、なぜ病名が知りたいのか聴く。全身状態が悪く緊急性が疑われるならすぐ受診。緊急性がなさそうで病気が気になる場合は日中に小児科受診(医師は変えない方がいい)病気自体は悪くなさそうな場合は、そう判断した理由を伝える。</li> <li>④感染症によって登園不可か、可かを示す。</li> <li>⑤〇〇の病気がなぜ心配か、理由を聴く。</li> <li>⑥パパの心配もねぎらい、聞いた状態の判断や受診の目安を伝える</li> </ul>

相談の背景に感じる社会問題 「核家族化対策の乏しさ」

人を育てるには人の存在が欠かせません。現代では多くの親が赤ちゃんと関わった経験がなく、祖母が就労あるいは祖母の乳幼児の養育力も高くない状況下で、子育てだけでも大変なのに、病気やケガの時にどうしていいかわからず、情報があっても、困惑するのは当然と言えます。



図：時代別に見る家庭環境の遷り変わり

例えて言えば、自動車を運転するのに、教習所にも行かずいきなり車を与えられて公道を走るようなものではないでしょうか。「ここにアクセルがあり踏んだら前に進む、こちらはブレーキで踏んだら止まる、ハンドルを回せば方向が変わる、道案内はカーナビがあれば大丈夫、だから頑張れ、ドライブは楽しいよ」と言われても、運転自体が怖くて仕方がないでしょう。

運転経験がない父親が助手席に居ても運転を交代しても、状況はそれほど変わりません。病気やケガは、急に現れた狭い道路や信号を強引に横切る車が現れたような出来事で、冷静に対処すれば大した問題ではないのですが、未経験では怖いのも無理はありません。いざという時に寄り添える支援が必要でしょう。

